岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

# 八丁館遺跡発掘調査報告書

## 個人住宅新築工事に伴う発掘調査

令和４年３月

一関市教育委員会

# 序

一関市大東町摺沢地区は、古くから交通の要衝であり、現在でもJR大船渡線のほか、国道343号、456号が通っています。この地区では、縄文時代から人々の生活が確認でき、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在していますが、その一つに、八丁館遺跡があります。八丁館遺跡は、中世の城館跡で、別名を数流沢城（するさわじょう）といいます。平成12年（2000）に、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる岩手県の治山事業に伴う緊急発掘調査が実施され、掘立柱建物や須恵器などが確認されています。

このたび、個人住宅新築工事が令和元年度に計画され、試掘調査を実施したところ、柱穴や溝を確認したため、令和２年度に緊急発掘調査を実施し、その成果を本報告書にまとめました。本報告書により、この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待するとともに、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際してご協力を頂きました地権者、工事関係者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々に衷心より感謝を申し上げ、本報告書発行のあいさつといたします。

令和４年３月

一関市教育委員会

教育長　　小　菅　正　晴

# 例　　言

1　本書は、岩手県一関市教育委員会が令和２年度に実施した八丁館遺跡発掘調査の報告書である。

2　調査は、一関市大東町摺沢字但馬崎地内の個人住宅新築工事に係る試掘調査において遺構を確認した範囲及びその周辺の掘削を受ける範囲の記録保存を目的とした、緊急発掘調査である。

3　調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。

4　調査対象地は、八丁館遺跡（一関市大東町摺沢字但馬崎64-8、64-12地先）である。

5　調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。また、岩手県教育委員会の協力を得た。

6　調査体制は以下のとおり。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一関市教育委員会　文化財課 | 課長 | 千葉　浩 | |
| | 文化財係長 | 金野　修 | |
| | 主任学芸員 | 菅原孝明 | |
| | 文化財調査研究員 | 光井文行 | |
| | | 阿部　充 | |
| | 会計年度任用職員 | 小岩誠也 | |

7　本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。

8　本書図３に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
（許可番号　令和４年２月15日総第11012号）

9　土層断面図の土色表示は、新版標準土色帖2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。

10　調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社に、調査補助業務を本寺地区地域づくり推進協議会に、環境整備業務は後藤工建株式会社に、それぞれ委託した。

11　調査協力者・機関（敬称略・50音順）
及川幸子、加藤和子、加藤慶一、加藤隆一、小岩寿男、佐々木光昭、佐藤健爾、佐藤光雄、佐野修弘、那須眞、二階堂孝子、羽柴直人
岩手県教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、積水ハウス株式会社岩手支店、本寺地区地域づくり推進協議会

# 目　　次

序…… 1

例言…… 3

目次…… 4

1　遺跡の位置と地理・歴史的環境…… 5

2　調査に至る経緯…… 11

3　調査結果…… 13

4　まとめ…… 18

遺物観察表…… 23

写真図版…… 25

## 1　遺跡の位置と地理・歴史的環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年９月20日に一関市、花泉町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の７市町村が合併、さらに平成23年９月26日藤沢町と合併した。東西に約63㎞、南北に約46㎞の広がりを見せる市の総面積は1,256.42㎢である。

中央部を南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（標高1626.5m）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年《1968》）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」、（平成17年《2005》国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年《2006》）国選定）、下流部には変化に富んだ渓谷景観をなす名勝及び天然記念物「厳美渓」（昭和２年《1927》国指定）がある。東側には、同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名勝「猊鼻渓」（大正14年《1925》国指定）がある。

八丁館遺跡のある一関市大東町（大東地域）は岩手県南東部に位置し、北は奥州市、住田町、東は陸前高田市、南は一関市千厩町（千厩地域）、西は一関市東山町（東山地域）と接している。

（一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「１.位置と環境」より一部引用）

### （１）地理的環境

本遺跡のある一関市大東町（大東地域）は北上山地の南西部にあたる。東に室根山（標高895m）、北に鷹ノ巣山（標高792m）、蓬莱山（標高788m）、西に大八鉢森山（標高634m）がある。地質は主として古生代の粘板岩・砂岩・石灰岩およびこれらに併入する花崗岩でなっている。さらに横張、摺沢、横沢の各丘陵地に丸木層と呼ばれる新第三紀層が加わっている。

標高200m～400mの丘陵地は、大住山を中心に砂鉄川と興田川に挟まれた地域及び蓬莱山を中心とする西部産地の東縁に分布し、主として花崗岩を基盤としている。標高200m以下の丘陵地は、砂鉄川南部の摺沢、若宮、西部の横沢、北部の伊手付近に分布している。基盤岩は花崗岩が主であるが、横張、摺沢、横沢の丘陵地は、新第三紀の丸木層と呼ばれる、亜円礫～円礫のくされ礫を含む砂礫層に覆われている。これらの丘陵地を開析する谷は、一般に浅くゆるやかである。

砂鉄川は、鷹ノ巣山、蛇山などの南麓を源頭部とし、大原地区で南寄りに西に向きを変え、興田川、曽慶川、猿沢川、山谷川などを集水して北上川と合流する。上流を除いてかなり広い谷底平野が発達するが、下流では猊鼻渓などの峡谷部が連続する。

（岩手県企画開発室1974『北上山系開発地域　土地分類基本調査　陸中大原』より）

国土地理院発行1.5万分の1地形図を加工して作成

図１　八丁館遺跡位置図

（２）歴史的環境（図２）

本遺跡のある一関市大東町（大東地域）の主な遺跡をみると、旧石器が百目木遺跡から出土している。縄文時代の遺跡は、前期が龍願寺遺跡、古戸前遺跡、中期が中野台遺跡、中・後・晩期が熊の平遺跡・西山遺跡、晩期が大洞地遺跡（図２の21）、伊勢堂Ⅲ（22）がある。

弥生時代の遺跡は大洞地遺跡で、弥生式土器が出土している。遺構は確認されていない。

古墳時代の遺跡として、大洞地遺跡から北海道系の土器が出土しており、この時期に北から南下していたことがわかる。北海道系の土器は千厩地域にある大浜Ⅱ遺跡からも出土している。また、大東町中川から出土したとされる須恵器瓹（はそう）もある。

古代の歴史的記述は残されていないが、考古学的に土師器、須恵器などが出土し、竪穴住居跡も検出されている。また、摺沢八幡神社境内から蕨手刀が出土している。遺跡としては、下渋民遺跡（15）、伊勢堂Ⅰ遺跡、伊勢堂Ⅲ遺跡（22）、佐野脇Ⅱ遺跡（23）、大明神Ⅱ遺跡（28）などがあり、平安時代前期に人々が北上してきたことがうかがえる。11世紀に起こった前九年合戦についての伝承として伝えられている。

鎌倉時代以降、現在の岩手県南および宮城県の一部を支配していた葛西氏も、15世紀になると一統支配が揺るぎだす。中小の家臣の間で緊張関係が高まり、特に天文11年（1542）から始まった「伊達氏天文の乱」以降は激しさを増し、大騒乱の様相を呈してくる。このような世情緊要の中で、磐井郡内でも大小様々な城館が構築、改築されている。『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県教委1986）によると、砂鉄川流域66か所、千厩川流域54か所である。『大東町史上巻』（大東町教委1982）によると、大東地域の城館は30箇所である。中世の城館の大半は15世紀から16世紀を中心に築造されている。城館の多くは、平地を眺望できる河川や支沢に限られた段丘及び丘陵の縁辺に立地し、空堀と土塁に囲まれた複数の郭によって構成されている。断面がＶ字状の薬研堀や箱薬研堀と空堀に沿って盛土された土塁には、丸太材の柵がめぐらされている。

本遺跡の周辺にある城館（図２、表１）は、西に東館・西館（31）、摺沢柏木館（32）、北に大馬場（25）、摺沢萩館（30）、東に境田館（36）、田中館（37）、南に山の神館（33）、箒木洞館（34）などがある。これらの葛西領の諸城館は、天正18年（1590）の奥羽仕置の破却令により終焉を迎えている。

江戸時代になると、支配機構が整備され、物資の流通とともに人馬の往来が盛んになった。今泉街道は山目宿（一関市山目）から松川宿、長坂宿（以上東山地域）、摺沢宿、大原宿（以上大東地域）などを経て今泉宿（陸前高田市）を結ぶ道である。摺沢宿は天正年間に本宿から引町して伝えられている。摺沢は千厩を経て気仙街道とつながり、東西、南北を結ぶ交通の要衝地であった。砂鉄川の名を示すように、この地域は砂鉄の産地で、採鉱や製鉄、製錬、炭生産がさかんに行われた。砂鉄から製錬された荒鉄は、近隣の鋳物師、鍬師、細倉鉛山などに売却されたが、この地方の荒鉄の多くは、駄送により北上川岸まで運び、そこから舟で石巻に下して、鋳銭の原材料となった。これらの人たちに必要な物資を供給するために多くの人々がこの街道を往復した。物流の主なものは、内陸から煙草、紅花、生糸、楮、鉄製品や米で、沿岸からは塩や魚介類などである。

大東地域は、陸奥駒の産地として知られていた。近世には、幕府への献上品の一つとなっており、幕府の馬買いが毎年買い付けに訪れていた。また一般に、日常的な運搬の用途としての需要が多かった。馬の形はあまり良くないが、産出が多いのは気仙、江刺、磐井郡東山などだった。鑑札を受けた馬喰の数は、文政４年（1821）調査で889人存在した。内訳は磐井郡東山の99人が最高で、磐井郡西岩井、胆沢郡下胆沢の68人がこれに次いだ。馬産地帯と馬喰の数はほぼ比例しており、馬産が盛んであったことがうかがわれる。

（３）八丁館について（図３、写真図版１）

八丁館遺跡は、JR大船渡線摺沢駅から東に約１㎞、東西に延びる標高70m～105mの丘陵の西端に位置する。摺沢市街地の南側の高台がそうである。東から流れる曽慶川は本遺跡の西約２ｋｍで、砂鉄川と合流し、猊鼻渓を経て南流し、薄衣で北上川と合流している。曽慶川の両岸には狭い沖積地が形成されている。

八丁館は数流沢城、屏風館、臥牛館、八箇城と別称されている。本館の南側は、栃折沢より流れる小河川によって浸食され、急峻な崖になっている。丘陵の東側を幅約16mの空堀で尾根を切っている。東側頂部に本郭（48m×68m）をおき、その６ｍ下に二の郭（70m×50m）、その下４ｍに三の郭（37m×15m）、その下に四の郭（15m×12m）とＬ字形に連なる本郭、二の郭、三の郭までとりまく帯郭がある。二の郭の下には「馬隠し」（幅７ｍ、高さ10m位）と称する場所があり、小名も残る。付近に、馬場、搦手などの地名が残る。北に段々の張り出し部がある。物見といわれているが、館に付属するかは不明である。尾根づたいに、源八部落方面より引いたとされる引水の堰の跡が残っている。

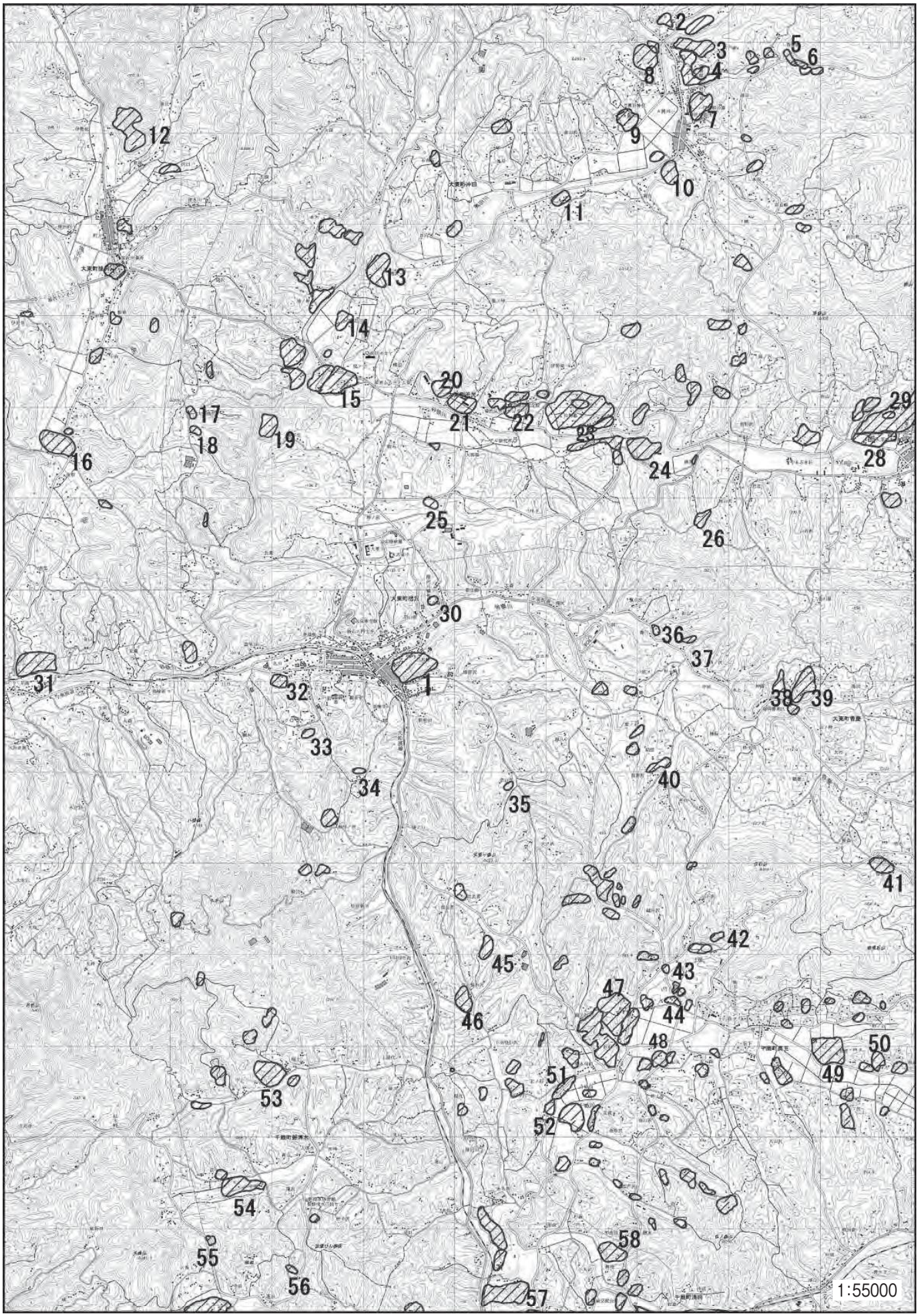
「仙台領古城書上」では、「山八丁城東西十八間南北十九間、二ノ丸東西三十二間南北三十六間　城主　岩淵　大炊」とある。

伝承によれば、安倍頼時が構築したもので、しばしば官軍と戦い勝を収めたとある。関東千葉氏の系を引く岩淵重正は、文治５年（1189）藤原泰衡征討には、葛西清重の下に従って軍功を立て、薄衣の内17貫の地を知行として拝領し、薄衣米倉城千葉弾正に仕え、同所岩淵氏の祖となった。

八丁館は、中世岩淵氏累代の居館と伝わる。また、新田（あるいは岩淵ともある）尾張義茂は天正18年（1590）にこの館で戦死しているから、この館も豊臣勢または伊達氏によって攻撃され落城したものであろうと考えられている。その後、摺沢氏と称して、伊達家臣になっている。

平成12年度に、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる栃折沢地区復旧治山事業に伴う八丁館遺跡の発掘調査が実施された。その結果、中世の掘立柱建物跡１棟、堀跡２条、溝跡３条、柱穴列１条、柱穴状土坑73基、炭化物４箇所が検出され、須恵器、かわらけ、磁器（中世）、骨が出土している。八丁館は、古代・中世の遺跡であることが考古学から立証されている。

（光井）




岩手県遺跡情報検索システム（令和２年度データ）を加工して作成

図２　周辺の遺跡分布図（古代・中世の遺跡を中心に）

| № | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 遺構・遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 八丁館（臥牛館・数流沢城） | 城館跡 | 中世 | 空堀、平場、帯郭（掘立遺構、土坑、焼土）南面部分 | H12一部調査（県埋文センター） |
| 2 | 若宮館 | 城館跡 | 中世 | 平場 | |
| 3 | 柏木館（鳥海館・東館） | 城館跡 | 中世 | 空壕、本丸、二の丸 | |
| 4 | 美女ヶ森館 | 城館跡 | 中世 | 空壕、平場、陶磁器片・古銭（西部館下） | H10散布地に遺物出土 |
| 5 | 鳥海Ⅱ | 散布地 | 縄文、古代 | 焼土・溝・道跡・土坑、縄文土器・土製品・石器・石製品・鉄製品 | |
| 6 | 鳥海Ⅳ | 散布地 | 縄文、古代 | 溝・焼土・土坑・配石、縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・鉄滓・銅製品 | |
| 7 | 伊勢館 | 散布地、城館跡 | 縄文、中世 | 建物・柱列・土坑・焼土・溝・柵列・集石・土塁・空堀・石列・土堰・石積・竪穴状建物・耕作遺構、陶磁器・古銭・鉄製品・石製品・柱根 | |
| 8 | 川嶋館（西館） | 城館跡 | 中世 | 堀、主郭、二の郭、腰郭 | |
| 9 | 祖母館（馬場館・乳母館） | 城館跡 | 中世 | 空壕 | 本丸跡・興田中学校 |
| 10 | 構館（月館） | 城館跡 | 中世 | 空堀、本丸、二の丸、壇 | |
| 11 | 館 | 城館跡 | 中世 | 土壇 | 口伝、屋敷跡か？ |
| 12 | 柴山館 | 城館跡 | 中世 | 柵列・土塁・段・焼土・土坑・炭焼き小屋跡、陶磁器・鉄製品・石器 | 諏訪館含む |
| 13 | 室石館（天狗田館） | 城館跡 | 中世 | 主郭、堀 | |
| 14 | 猿沢中館（中館・新渡戸館） | 城館跡 | 中世 | 土塁、堀跡 | 半壊 |
| 15 | 下渋民 | 散布地 | 縄文、平安、近世 | 竪穴式建築・竪穴状遺構・土坑・溝・配石・焼土、縄文土器・土製品・石器・フレーク・土師器・鉄製品・鉄滓・古銭・磁器 | |
| 16 | 渡戸館 | 城館跡 | 中世 | 空壕、井戸跡2ヶ所、北向に五輪堂と墓地 | 一部自治公民館として活用中 |
| 17 | 大畑南沢 | 散布地 | 縄文、古代 | 縄文土器（晩期）・石斧・須恵器 | |
| 18 | 大畑柳沢 | 散布地 | 縄文、古代 | 縄文土器（晩期）・石斧・須恵器 | |
| 19 | 延貝館 | 城館跡 | 中世 | | |
| 20 | 渋民萩館 | 城館跡 | 中世 | 平場、壇 | |
| 21 | 大洞地 | 散布地 | 縄文、古代、近世 | 竪穴状遺構・土坑・溝・竈跡・配石・集石、縄文土器・弥生土器・続縄文土器・土師器・須恵器・土製品・羽口・石器・母岩・フレーク・チップ・鉄製品・古銭 | |
| 22 | 伊勢堂Ⅲ | 散布地 | 縄文、古代 | 捨場遺構・焼土・竪穴式住居・溝・耕作時足跡・土坑・畝間状遺構・陥し穴・杭列、縄文土器・鉄滓・羽口・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品・鉄製品・銭貨 | |
| 23 | 佐野脇Ⅱ | 散布地 | 縄文～中世・近世 | 竪穴状遺構・土坑列・掘立柱建物・溝・柱列、縄文土器・石器・土師器・須恵器・鉄製品・銭 | |
| 24 | 根城館 | 城館跡 | 中世 | 空堀、馬場跡、平場、主郭、二の郭、三の郭 | |
| 25 | 大馬場 | 生産遺跡 | 縄文、古代 | 縄文土器、須恵器（9C） | 県内5例目の遺構 |
| 26 | 十文字館 | 城館跡 | 中世 | | |
| 28 | 大明神Ⅱ | 集落跡 | 縄文、古代 | 竪穴住居・炉・柱穴・埋設土器遺構・土坑・集石・溝・柵列・柱列・焼土、縄文土器・土師器・須恵器・土製品・石器・石製品・鉄製品・鉄滓・渡来銭 | 調査時前H6に37000余枚の中世一括出土銭あり |
| 29 | 山吹城（大原城） | 城館跡 | 中世 | 掘立柱建物・柱穴列・柵列・堀・土坑・竪穴式建物・竪穴状遺構、縄文土器・石器・土製品・陶磁器・土師器・須恵器・羽口・鉄製品・銭貨・生体遺物 | S54.3.20本丸跡町指定史跡 |
| 30 | 摺沢萩館 | 城館跡 | 中世 | 堀、平場、帯郭 | |
| 31 | 東館・西館 | 城館跡 | 中世 | 空堀、腰郭、主郭、二の郭 | |
| 32 | 摺沢柏木館 | 城館跡 | 中世 | | |
| 33 | 山の神館 | 城館跡 | 中世 | 空堀、主郭 | |
| 34 | 箒木洞館 | 城館跡 | 中世 | 盛土（頂部） | |
| 35 | 新城館 | 城館跡 | 中世 | 平場、堀 | |
| 36 | 境田館 | 散布地、城館跡 | 縄文、中世 | 小土坑、陶磁器・素焼土版・石器 | |
| 37 | 田中館 | 城館跡 | 中世 | 平場、堀、本丸、二の丸 | 平場は住宅 |
| 38 | 新館（西館） | 城館跡 | 中世 | 空壕、平場、帯郭、空堀 | |
| 39 | 中館（古館・曽慶館） | 城館跡 | 中世 | 空壕、本丸、土塁 | |
| 40 | 猫館 | 城館跡 | 中世、近世 | 土塁、掘立柱建物、土坑、柱穴、陶磁器 | 書上になし |
| 41 | 留館（遠見館） | 城館跡 | 中世 | | |
| 42 | 立石沢 | 散布地 | 古代 | 土師器 | |
| 43 | 竹ノ下Ⅰ | 散布地 | 古代 | 土師器？・鉄滓 | |
| 44 | 竹ノ下Ⅱ | 散布地 | 縄文？古代 | 縄文土器・鉄滓・土師器 | |
| 45 | 摺沢廻館 | 城館跡 | 中世 | 堀、本丸 | |
| 46 | 羽根折沢館（要害） | 城館跡 | 中世 | 空堀、平場 | |
| 47 | 立花城（橘城） | 城館跡 | 中世 | 平場、伝井戸跡、帯郭、堀、砥石 | |
| 48 | 船丸館（八ツ花館） | 城館跡 | 中世、近世 | 小平場、空掘状遺構 | |
| 49 | 牛生蓮館（かつら木館） | 城館跡 | 中世 | 平場、空堀、帯郭、堀 | |
| 50 | 新城 | 城館跡？ | 中世？ | | |
| 51 | 奥玉北ノ沢 | 散布地 | 古代 | 土師器 | |
| 52 | 刈屋野 | 散布地 | 古代 | 土師器 | |
| 53 | 仏坂城（愛宕館） | 散布地、城館跡 | 縄文、中世、近世 | 平場、井戸跡、空堀、縄文土器 | 亀卦川氏 |
| 54 | 寺沢城（中館） | 城館跡 | 中世 | 平場、空堀 | |
| 55 | 野黒館 | 城館跡 | 中世？ | | |
| 56 | 胡桃館 | 城館跡 | 中世 | | |
| 57 | 中沢館（館山館） | 城館跡 | 中世 | 平場、土器、堀切、主郭、土塁 | |
| 58 | 金田城（樋ノ口館） | 城館跡 | 中世 | 平場、空堀 | |

表１　周辺の遺跡一覧表

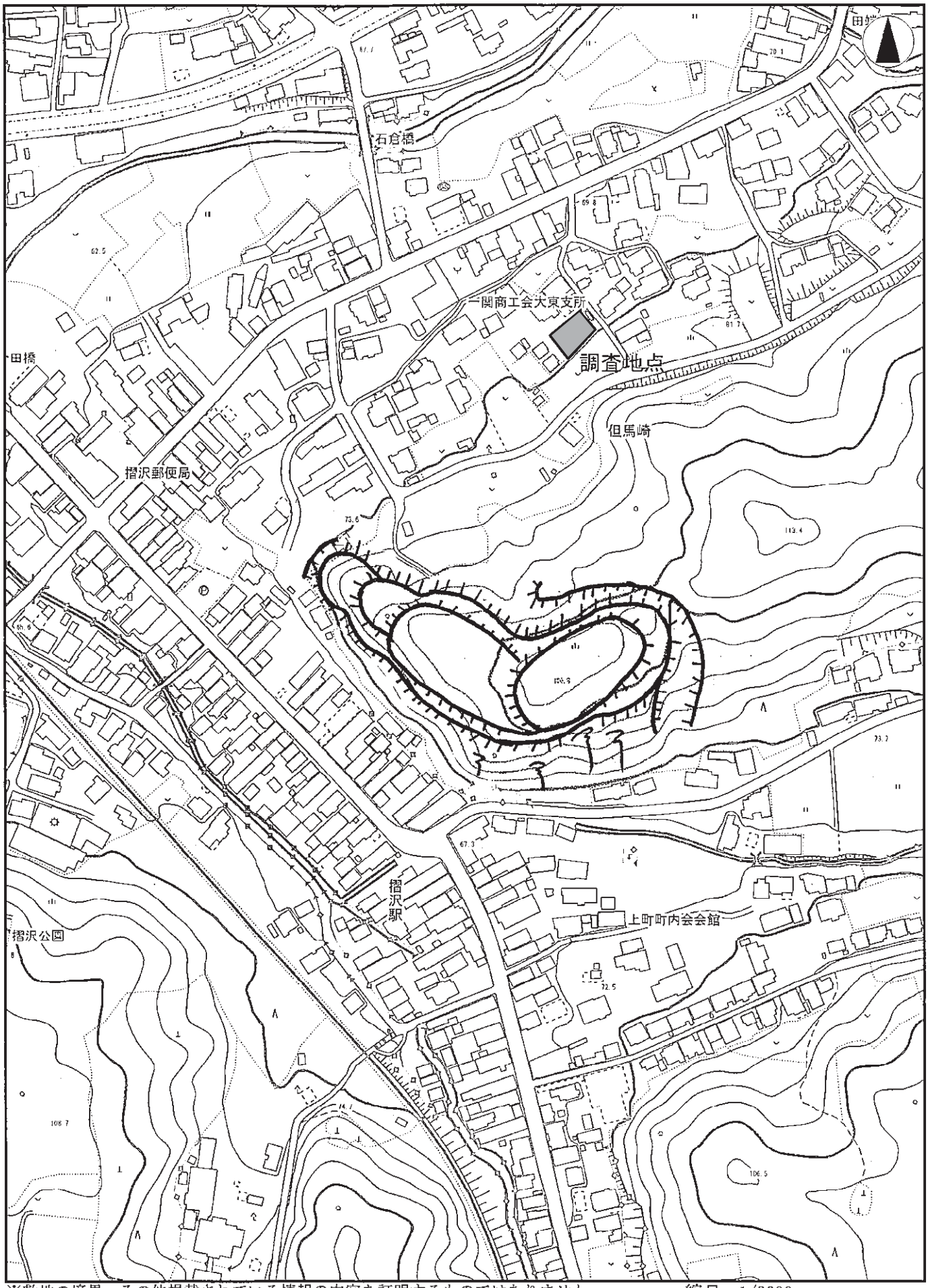
## ２　調査に至る経緯

令和元年（2019）11月８日、一関市大東町摺沢字但馬崎64-8、64-12における個人住宅新築工事にかかる試掘調査依頼書が提出された。この場所は、包蔵地の範囲外で、北に40m程離れた場所であった。この依頼書に基づき、11月20日に試掘調査を実施した。住宅建築予定地の範囲で、長さ７m、幅１mの南北トレンチを２本、長さ８m、幅１mの東西トレンチを１本設定したところ、西側の南北トレンチから地山上面で多数の柱穴を検出した。また、東西トレンチの東端と東側の南北トレンチの南端で、溝を検出した。試掘調査により検出した遺構は、八丁館遺跡に関係する可能性を示唆していると考えられた。

試掘調査の結果を受けて、個人住宅新築工事の施主と、住宅設計及び工事監理を担当する積水ハウス株式会社岩手支店との協議を行った。その結果、盛土工事を追加し、盛土の中で住宅の基礎を収めるように工法を変更することとなった。12月２日付で、工法を変更した埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けた。届出の内容では、住宅工事部分は掘削を行わないこととなったが、水道管の接続部分だけは掘削が必要であることから、工事立会を実施することとし、12月３日付け教文第09002号文書で工事着手時に市職員が立ち会うことを指示した。

その後、令和２年（2020）３月になって、積水ハウス株式会社岩手支店から、工事内容を変更して発掘調査の実施後に住宅建築を行いたいとの連絡があった。そして、４月24日付けで改めて埋蔵文化財発掘の届出の提出を受けた。盛土は実施せず、地盤を補強するために長さ５mコンクリート杭を45本埋めた上で２階建て個人住宅を新築する計画であった。この内容を受けて、４月28日付け教文第01025号文書により、事前の発掘調査を指示した。ただし、文化財課では５月から一関城遺跡の発掘調査を既に実施する計画を立てており、同時に発掘調査を進めることが困難であることから、その発掘調査が終了する７月から八丁館遺跡の発掘調査を実施することとした。

（菅原）




※敷地の境界，その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。　　縮尺　1/3000

『岩手県中世城館跡分布調査報告書』（岩手県教育委員会1986）より転写、加筆

図３　八丁館遺跡と調査区位置図

## ３　調査結果

調査地点は、一関市大東町摺沢字但馬崎に所在する。標高は73～74mである。現況は畑地である。調査は重機により、表土を除去した後、手作業で、Ⅱ層を掘り下げ、Ⅲ層の地山で遺構検出、精査を行った。最初に西側半分を調査した後、東側の盛土を取り除いて東側を調査した。

調査期間は令和２年７月20日～11月13日、調査面積は約230㎡である。

調査区は東西が長い長方形をなし、最大東西径約22m、南北最大径約11mである。

平面図の作成に当たっては、下記の基準杭の座標をもとに、実測を行った。写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は、以下のとおりである。

基準点（KI-1）№1　X=－111449.927、Y=43194.021、H=74.829m

基準点（KI-2）№2　X=－111461.410、Y=43178.267、H=73.749m

### （１）基本土層

Ⅰ層：10YR3/4暗褐色シルト層。しまっていない。粘性なし。耕作などによる攪乱が多くみられる。ゴミ焼き跡があり、炭化したものや焼成を受けたものが含まれている。中央北側が厚い。層厚約20～30cm。

Ⅱ層：10YR3/3暗褐色シルト層。しまっていない。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。小礫を幾分含む。層厚約15～20cm

Ⅲ層：10YR5/6黄褐色シルト層。しまっている。粘性なし。耕作痕による攪乱多くあり。地山。遺構検出面。層厚約70～80cm。

Ⅳ層：10YR6/2灰黄褐色粘土質シルト層:しまっている。粘性ややあり。層厚約120cm以上。

### （２）確認された遺構と遺物

確認された遺構（図４）は、竪穴遺構３基、大溝跡・溝跡５条である。

**大溝跡SD-1**（図５、写真図版2-2、3-1・2）

調査区西側にある。南西から北東方向に延びている。Ⅲ層検出面で黒褐色の広がりが見え、遺構と判明したものである。大溝は南西側が途切れている。形状は細長い溝状で、上幅が約5.9～6.6m、長さ約9.6m、深さ約2.5m、断面形がＶ字形（薬研掘）である。下にある古い大溝（SD-2）の上部とSD-3・4の西側を切って作られている。３つの溝の新旧関係は、新しい順位にSD-1→SD-3・4→SD-2である。

埋土は上位が小石、黄褐色シルトの小ブロックを含む黒褐色シルト層、中位が褐色シルト層とにぶい黄褐色シルト層が上にのる黒褐色シルト層、下位が黄褐色シルトの小ブロックをやや多く含む黒褐色シルト層で構成されている。埋土の断面が三角状やＵ字形を呈し、自然堆積の様相を呈している。壁は直線状に立ち上がり、傾斜度が約36～39度である。

出土遺物は埋土から磁器３点（表２－１の１、２、３）、陶器２点（表２－１の４、５）である。１、２は中国産の皿で、江戸時代直前に位置づけられている。４は瀬戸美濃産の皿で17世紀初頭のものである。５は在地産の甕の底部片で江戸末のものである。鉄製品が１点（表３の１）埋土から出土している。用途は不明である。出土遺物などから、時期は17世紀代に位置づけられるものと考えられる。

**大溝跡SD-2**（図５、写真図版3-1・2）

調査区西側にあり、上半部をSD-1に切られている。SD-1と同じように南西から北東方向に延びている。残存する溝の幅は約3.4m、深さ約4.2mで、断面形はU字形を呈する。

埋土は上部が黒褐色シルトをラミナ状に含む暗褐色粘土質シルト層、中位が暗褐色粘土質シルトを壁際に含む褐色～黒褐色粘土質シルト層、下位が下部に暗褐色粘土質シルトの小ブロックを含む黒褐色粘土質シルト層で構成されている。上位、中位は自然堆積と考えられる。壁は緩く内湾しながら立ち上がっている。出土遺物はない。時期は、重複関係から16～17世紀代に位置づけられると考えられる。

**大溝跡SD-3**（図６、写真図版4-1・2）

調査区中央部にあり南北方向に延びている。Ⅲ層上で灰黄褐色土、黒褐色土の広がりがあり遺構と判明したものである。SD-4を切ってつくられている。また、SD-1に切られている。埋土上部が攪乱を受けているが、残存部から上幅は約3.8m、下幅約1.1m、深さは約1.2m、断面形が幅広いU字形である。

埋土は、上半部が灰白色シルトの小ブロックを含む灰黄褐色シルト層、下半部が黄褐色シルトの大ブロックを含む褐色シルト層で占められている。人為的な堆積の様相がみられる。底面は平担でしまっている。壁は緩く外反している。出土遺物はない。時期は、重複関係から16～17世紀代に位置づけられると考えられる。

**大溝跡SD-4**（図６、写真図版4-1・2）

調査区中央部にあり、Ⅲ層上面で検出されている。東側の上半部はSD-3に切られ北側でSD-1にも切られている。規模は、残存部から、上幅約３ｍ（推定）、下幅約2.1m、深さ約1.7mで、断面形が幅の広いU字形を呈している。

埋土は大部分が、黒褐色シルトと褐色シルトの混合土で、最下部に褐色シルトの小ブロックを含む暗褐色シルト層で占められている。壁は緩く外反している。底面は多少凹凸があるが平担でしまっている。出土遺物はない。時期は、重複関係から16～17世紀代に位置づけられると考えられる。

**溝跡SD-5**（図６、写真図版4-3・4）

調査区東側の北端部に位置する。Ⅲ層上面で検出されている。トレンチ３本をいれて、精査した。南北方向に延びている。規模は、上幅約2.1m、下幅1.4m、深さ約0.7mである。北側は攪乱を受けている。確認できる長さは約６ｍである。断面形は、緩いU字形を呈している。

埋土の大半は黄褐色シルトの小ブロックを含む黒褐色シルト層で占められ、下位に黒褐色シルト層が堆積している。本遺構が西側にどのようにのびているか把握できなかったため、SD-3・4との重複関係は不明である。出土遺物はない。時期は不明である。

**竪穴遺構SX-1**（図７、写真図版4-5・6）

調査区南西隅から検出された。Ⅲ層上面で黒褐色シルトとの広がりがみられ遺構としたものである。西側と南側は調査区域外にあり、北東部を精査した。近接しているSD-1は北東側約１ｍにある。

形状は多角形を呈し、最大の北西―南東の長さが3.1mである。埋土は上位が黒褐色シルト層、

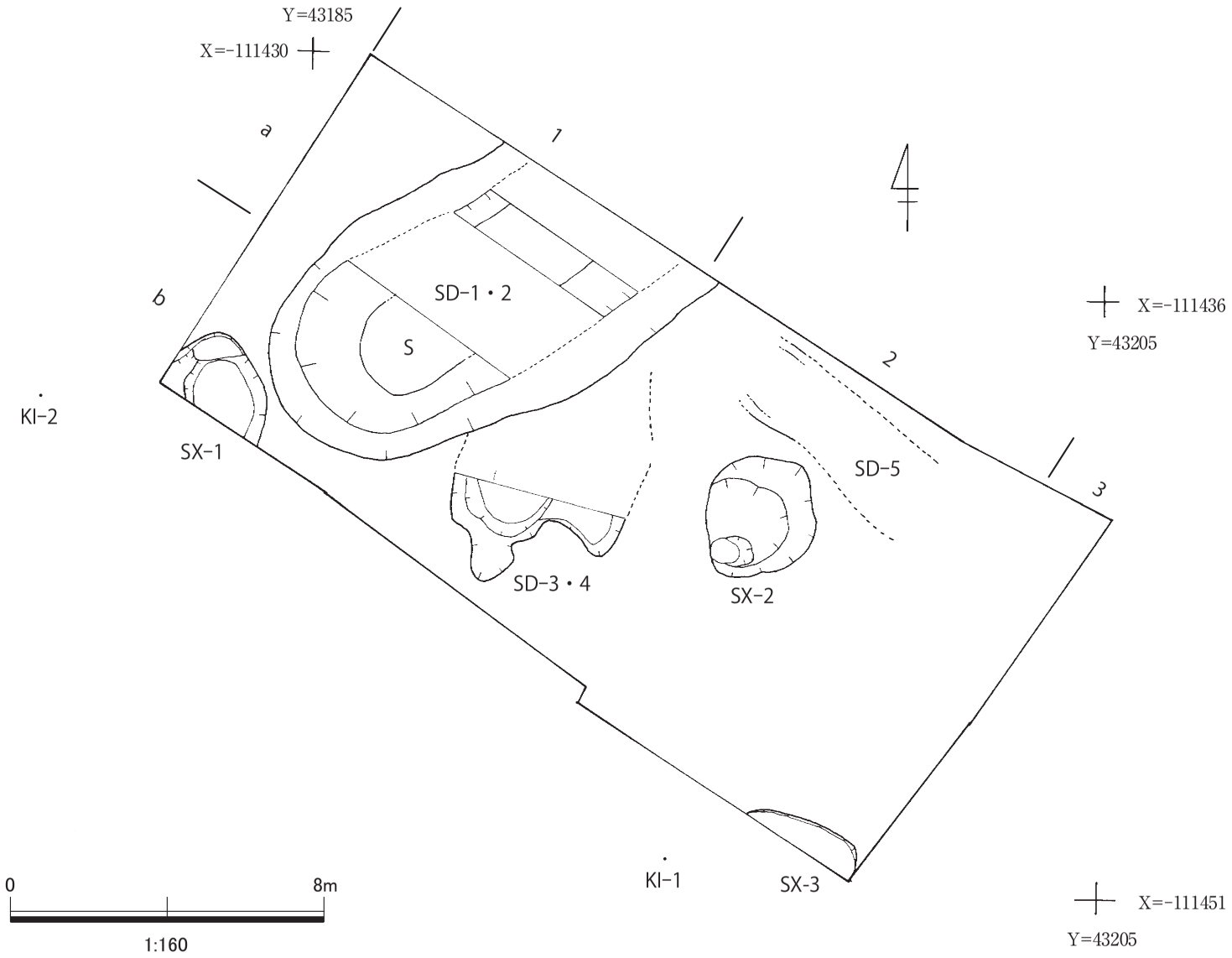

Y=43185
X=-111430
a
1
b
SD-1・2
S
X=-111436
Y=43205
2
KI-2
SX-1
SD-5
3
SD-3・4
SX-2
KI-1
SX-3
0
8m
1:160
X=-111451
Y=43205

図４　調査区平面図

中位が直線状に並んでいる黄褐色シルトの小ブロックを多く含む黒褐色シルト層、下位が黄褐色シルトの大ブロックを多く含む黒褐色シルト層で構成している。上位は自然堆積、中・下位は一部人為堆積の様相を呈している。初め精査の段階で、硬くしまった階段状の底面が検出された。しかし、黒土が下にもぐっているため、地山でないと判断して、実測せずに取り除いてしまった。全体として底面の凹凸が激しく斜めになっている。黄褐色土を掘り込んでいる面を底面とした。まだ、一部黒褐色土がもぐっている。

遺構の性格としては、底面が階段状になり、穴全体が南側にすぼんでいる。このことから、土を掘って最下部にある粘土を採取した穴でないかと推定している。遺物として、埋土から磁器製の盃が１点（表２－１の７、写真図版5-7・8）出土している。時期は近代以降ものと考えられる。

**竪穴遺構SX-2**（図７、写真図版4-7・8）

調査区中央部よりやや東よりに位置する。Ⅲ層上面での検出で、黒褐色土の円状の広がりがあり、遺構と判明したものである。形状は不整円形を呈し、規模は東西径約2.9m、南北径約3.4m、深さ約1.9mである。他の遺構との重複関係はない。

埋土は上半部が中位に黄褐色シルトのブロックを含む黒褐色シルト層、下半部は黒褐色シルト層を含むにぶい黄褐色シルト層で構成されている。下半部は混合土でブロック状にまじりあっており、人為的堆積の様相を呈している。底面は南側に下がる階段状をなしている。底面は硬くしまっている。南壁は底が掘り込まれオーバーハングしている。遺構全体は南側にすぼんでいる。北壁際に溝状の穴が検出されている。深さ40cm以上あったと推定され、板材などをはめていたとも考えられる。土を掘り込んで、最下部にある粘土を採取していた穴ではないかと推定される。出土遺物はなく、SX-1と同じ近代以降のものと考えられる。

**竪穴遺構SX-3**（図８、写真図版5-1・2）

南東隅に位置し、大半が調査区域外にあり、北側の一部を精査した。Ⅲ層上面で細長い黒褐色の広がりが見え、遺構と判明したものである。検出された部分での規模は東西径約３m、最大南北径約0.8m、深さ約0.7mである。他の遺構との重複関係はない。

埋土は、表土を除いて上位が黄褐色シルト層、中位が黒褐色シルトのブロックを多く含む明黄褐色シルト層、最下部が黒褐色シルト層で構成されている。上位、中位は人為的堆積の様相を呈している。遺構は北壁の一部で底面まで達していない。埋土の堆積の仕方は、SD-3やSD-5の溝跡と一部類似している。まだ遺構が完全に埋まり切れない状態にあるときに、ほぼ同じ時期に埋め戻された可能性がある。竪穴遺構として扱ったが、溝跡の可能性もある。出土遺物はない。時期については不明である。

**遺構外出土遺物**（図８、写真図版5-6～8・6・表２・３）

遺構外から出土した遺物は土師器１点、磁器陶器類48点、鉄器類３点、鉄滓１点である。土師器片（35）はロクロ不使用で、ヘラナデで調整されている底部片で、古代・中世のものである。磁器類は近世、近代のものが出土している。近世のものでは、肥前産の碗３点（15、16、18）、皿７点（19、48、49、52、53、55）で18世紀代のものである。また、中国産の染付皿が１点（26）で江戸時代直前に位置づけられるものである。陶器では、中世、近世、近代のものが出土している。20は瀬戸美

濃産の天目茶碗で、16世紀後半～17世紀のものである。22は美濃産の皿で江戸時代直前のもの、24は瀬戸美濃産の鉄絵皿で、16世紀末～17世紀初頭のものである。９は大堀相馬産碗で18世紀代に位置づけられる。鉄器類で刀子１点（２）、輪１点（４）、鉄滓１点（３）、用途不明品１点（１）が出土している。時期は不明である。

（光井）

## ４　まとめ

確認された遺構は、竪穴遺構３基、大溝跡・溝跡５条である。大溝がある程度埋まり切った段階で、上部を削って新しい大溝が作られている。SD-1はSD-2を、SD-3はSD-4を切っている。規模、位置などを加味して考えると、古い順にSD-2→SD-4→SD-3→SD-1である。SD-5は最も新しいと考えられる。SD-1は17世紀代に位置づけられることから、SD-2、SD-3、SD-4は16世紀から17世紀に位置づけられると考えられる。16世紀から17世紀にかけて、大溝が繰り返し作られていたことが判明した。SD-1、SD-2は規模からのみ考えると、堀ということもできる。

竪穴遺構のSX-1、SX-2は、底面が階段状を呈し踏み固められていることや、片側が深く掘られていることから、土取り穴でないかと推定した。時期は不明である。

遺構外出土遺物から土師器が出土しており、平成12年（2000）に調査された八丁館遺跡からも平安時代の遺物である須恵器が出土している。古代からこの地域が利用されていたことがわかる。近代に次いで、16世紀後半または17世紀初頭にかけての磁器、陶器の出土が多い。瀬戸美濃産の天目茶碗も出土しており、喫茶の知識と教養を持ち合わせていた人がいたことがうかがわせる。また、鉄滓が出土しており、鍛冶関係の作業が周辺でも行われていた可能性がある。鉄器でも鉄鏃などの武器類は検出されていない。

調査区は、八丁館遺跡から北に40m下った緩やかな平坦面に位置していることや、宿場町の東側近郊にもあたり、古代、中世、近世を経て近代までこの地域が活動、利用されていた地域であったと考えられる。

今回の調査により、八丁館遺跡の包蔵地の範囲が北側に大きく拡大されることも判明した。

（光井）

**【参考引用文献】**


岩手県企画開発室1974『北上山系開発地域　土地分類基本調査　陸中大原』

岩手県教育委員会1980『今泉街道』岩手県文化財調査報告書第41集

新人物往来社1980『日本城郭大系2 青森、岩手、秋田』

大東町教育委員会1982『大東町史　上巻』

大東町教育委員会1984『増補　大東町の城跡』大東町文化財報告書第15集

岩手県教育委員会1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

河出書房新社1995『図説　岩手県の歴史』

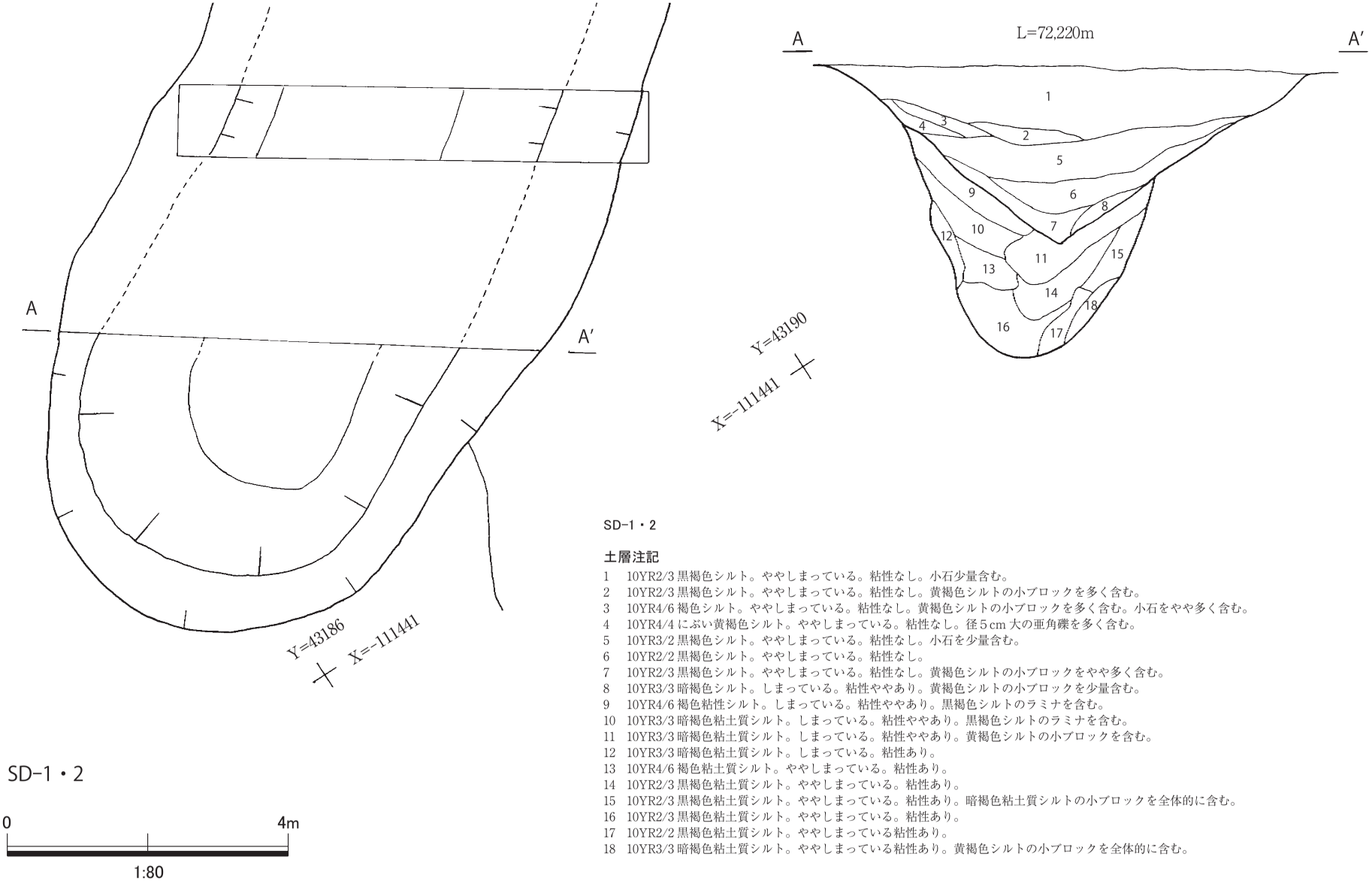
大東町教育委員会1998『大東町の古道』大東町文化財報告書第18集

千厩町1999『千厩町史　第１巻』

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2001『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成12年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集

吉川弘文館2003 街道の日本史7『平泉と奥州道中』

一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集

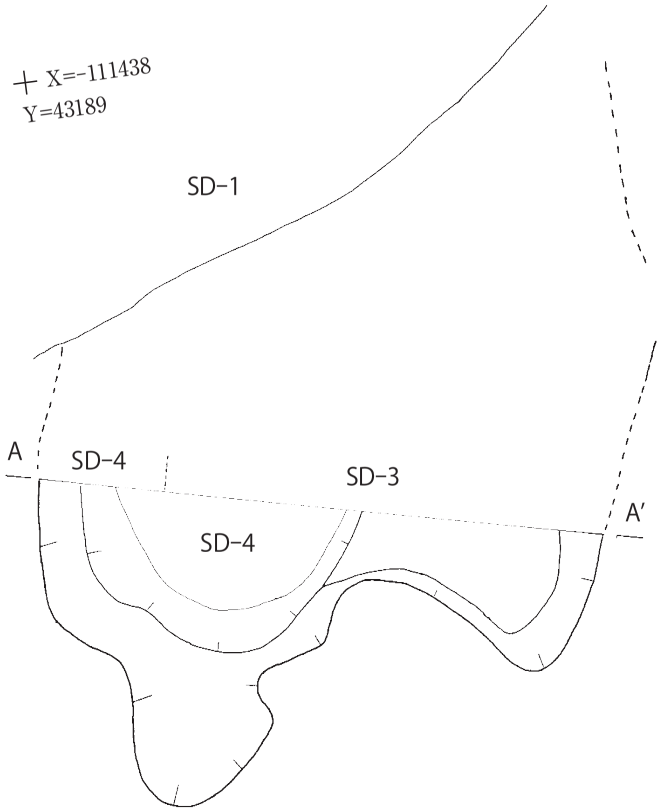


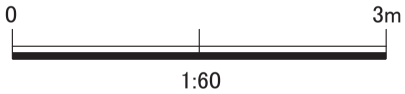

SD-1・2

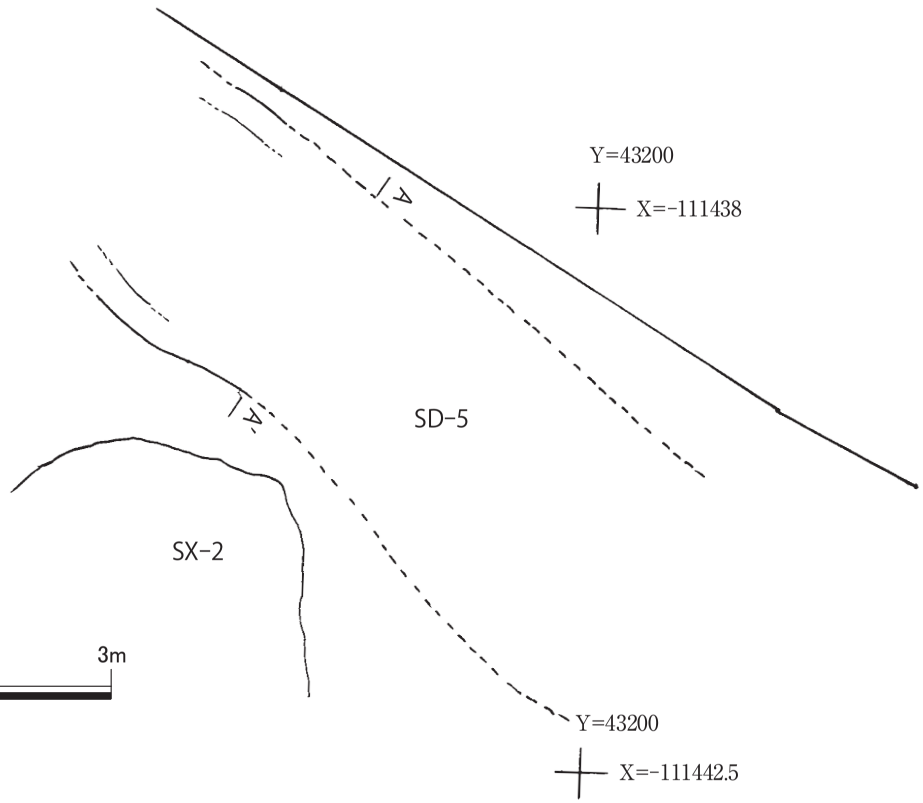
**土層注記**

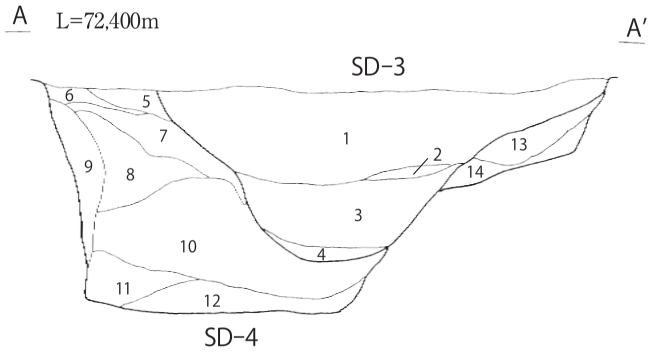
1　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。小石少量含む。
2　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。
3　10YR4/6 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。小石をやや多く含む。
4　10YR4/4 にぶい黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。径5cm 大の亜角礫を多く含む。
5　10YR3/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。小石を少量含む。
6　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
7　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックをやや多く含む。
8　10YR3/3 暗褐色シルト。しまっている。粘性ややあり。黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。
9　10YR4/6 褐色粘性シルト。しまっている。粘性ややあり。黒褐色シルトのラミナを含む。
10　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。黒褐色シルトのラミナを含む。
11　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性ややあり。黄褐色シルトの小ブロックを含む。
12　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。しまっている。粘性あり。
13　10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
14　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
15　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。暗褐色粘土質シルトの小ブロックを全体的に含む。
16　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
17　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている粘性あり。
18　10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。ややしまっている粘性あり。黄褐色シルトの小ブロックを全体的に含む。

図5　SD-1・2　実測図



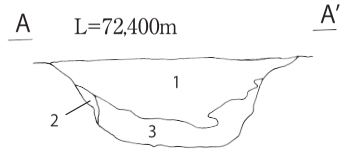




SD-3・4

**土層注記**

1　10YR6/2 灰黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。灰白色シルトの小ブロックを多く含む。
2　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。褐色シルトの小ブロックを含む。
3　10YR4/6 褐色シルト。しまっている。粘性なし。黄褐色シルトの大ブロックを含む。
4　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。
5　10YR4/6 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黒褐色シルトの小ブロックを含む。
6　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。褐色シルトの小ブロックを含む。
7　10YR4/6 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黒褐色シルトの小ブロックを含む。
8　10YR4/6 褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黒褐色シルトの混合土。
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。
10　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている粘性なし。褐色シルトの混合土。
11　10YR2/3 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。
12　10YR2/3 黒褐色シルト。ややしまっている粘性なし。褐色シルトの大ブロックを含む。
13　10YR4/6 褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。
14　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。

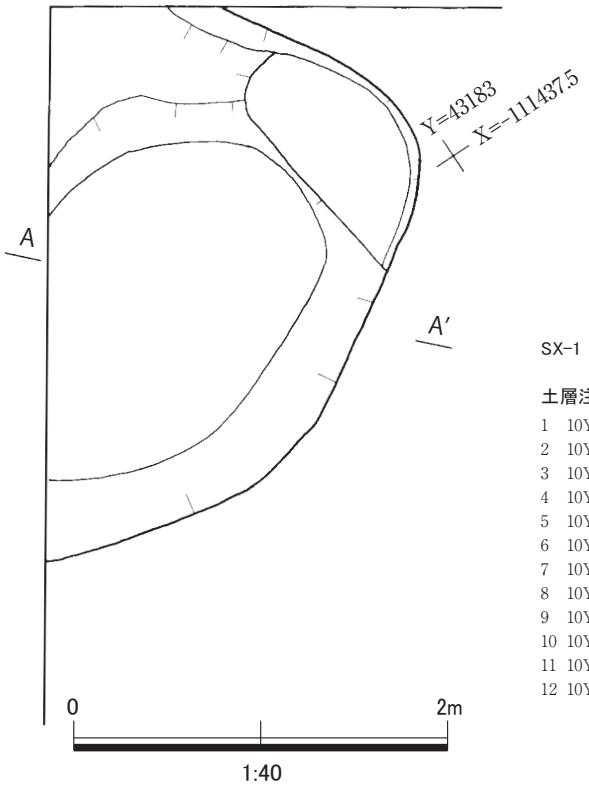


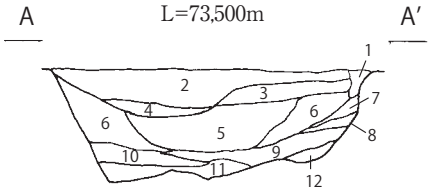

SD-5

**土層注記**

1　10YR5/6 黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。黒褐色シルトの小ブロックを少量含む。
2　10YR3/1 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。
3　10YR2/2 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。黄褐色シルトの中ブロックをやや多く含む。

図６　SD-3・4・5　実測図

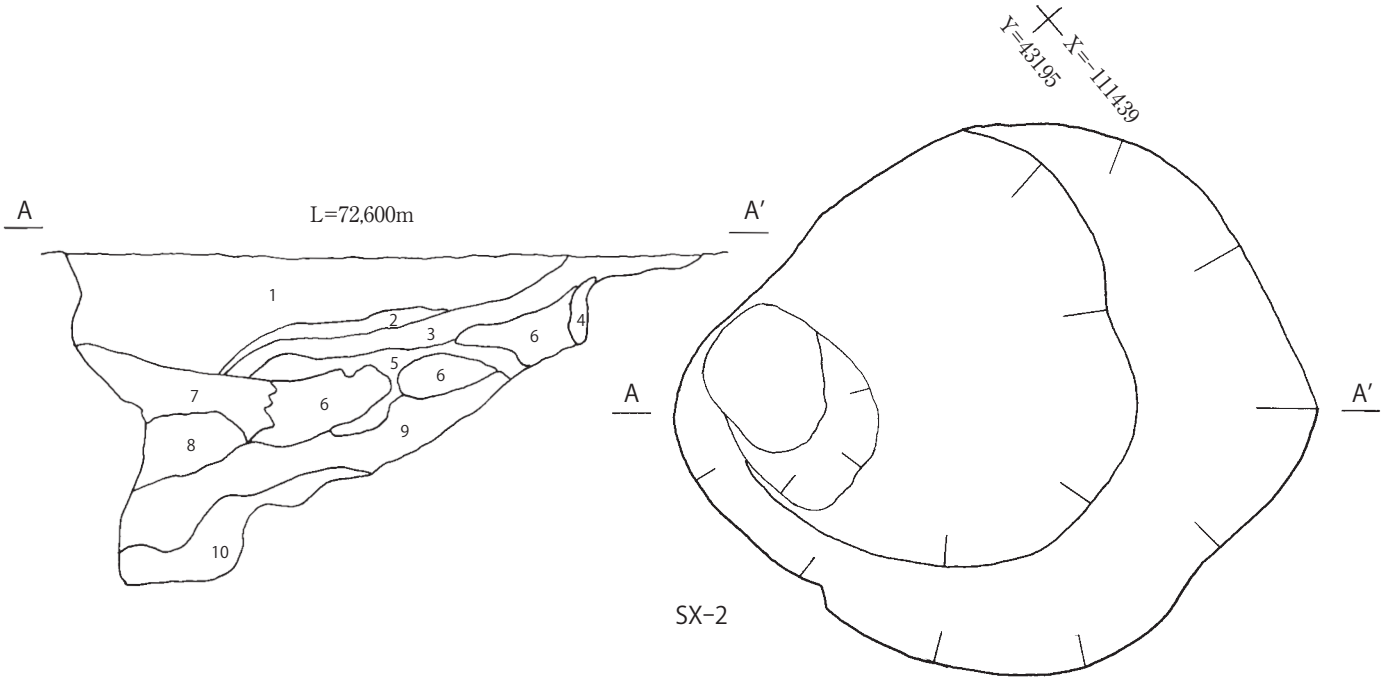



SX-1

**土層注記**

1　10YR3/1 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。
2　10YR2/2 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。中央にカクランあり。
3　10YR3/3 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。褐色シルトの小ブロックを少量含む。
4　10YR3/1 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。
5　10YR3/3 暗褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。褐色シルトの小ブロックを全体に多く含む。
6　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。褐色の小ブロックを少量含む。
7　10YR3/1 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
8　10YR5/6 黄褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
9　10YR2/2 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。暗褐色シルトを少量含む。
10　10YR2/2 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。
11　10YR3/1 黒褐色シルト。しまっている。粘性なし。褐色シルトの小ブロックを含む。
12　10YR3/1 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを含む。




SX-2

**土層注記**

1　10YR3/1 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。灰白色シルトを少量含む。
2　10YR5/6 黄褐色シルト。しまっていない。粘性なし。下位に灰白色シルトが帯状に堆積している。
3　10YR3/1 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。
4　10YR2/2 黒褐色シルト。しまっていない。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。
5　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。
6　10YR5/6 黄褐色シルト。しまっている。粘性なし。
7　10YR3/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。黄褐色シルトの小ブロックを多く含む。
8　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性なし。
9　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。しまっていない。粘性ややあり。
10　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。しまっている。粘性ややあり。黒褐色シルトの小ブロックを下位に多く含む。

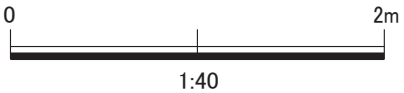
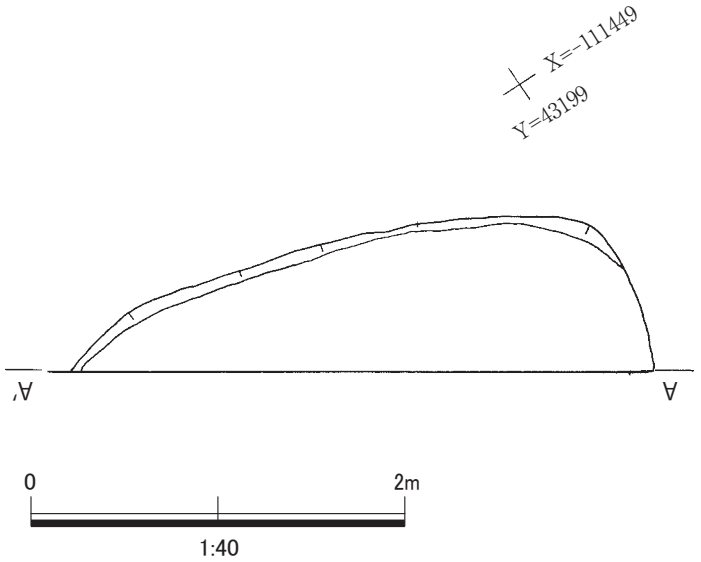
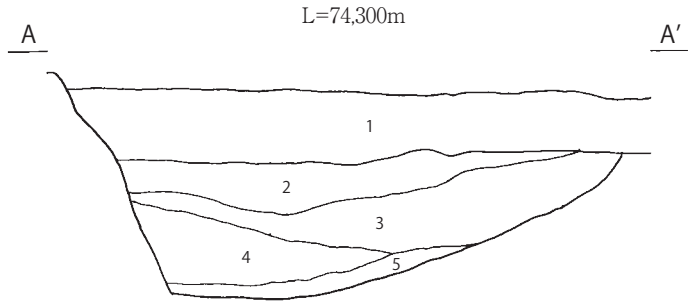



図７　SX-1・2　実測図

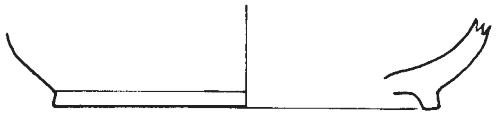



SX-3

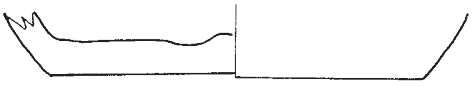
**土層注記**

1　10YR3/3 暗褐色シルト。しまっていない。粘性なし。表土。
2　10YR7/1 黄褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。人為的な堆積。
3　10YR2/2 黒褐色粘土質シルト。ややしまっている。粘性ややあり。
4　10YR6/6 明黄褐粘土質シルト。ややしまっている。粘性あり。黒褐色シルトの小ブロックを下位に多く含む。
5　10YR2/2 黒褐色シルト。ややしまっている。粘性ややあり。



No. 2

No. 4



No. 5

図８　SX-3　実測図と遺物

| No. | 出土地点 | 層位 | 種別 | 器種 | 残存部位 | 法量（cm） | | | （mm） | 重量(g) | 年代 | 備　　考 | 写真図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 厚さ | | | | |
| 1 | SD-1 | 埋土 | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 2.6 | 1g未満 | 江戸時代直前 | 中国産　染付 | 写真図版5-7 |
| 2 | SD-1 | 埋土 | 磁器 | 皿 | 底部台付 | － | － | (7.6) | 2.7～3.7 | 4.8 | 江戸時代直前 | 中国産　染付 | 写真図版5-7 |
| 3 | SD-1 | 埋土 | 磁器 | 皿 | 口～胴部 | － | － | － | 2.3～3.9 | 1g未満 | 18C代 | 染付 | 写真図版5-7 |
| 4 | SD-1 | 埋土 | 陶器 | 皿 | 口～底部 | 8.9 | 1.7 | 4.2 | 3.9～4.5 | 14.0 | 17C初 | 瀬戸美濃産 | 写真図版5-7 |
| 5 | SD-1 | 埋土 | 陶器 | 甕 | 底部 | － | － | 7.1 | 5.6 | 45.6 | 江戸末～明治 | 回転ヘラ切り　在地産 | 写真図版5-7 |
| 6 | 1a区 | Ⅰ層 | 磁器 | 皿 | 体部 | － | － | － | 2.6 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版5-7 |
| 7 | SX-1 | Ⅰ層 | 磁器 | 盃 | 口縁～底部 | － | － | － | 1.9～2.3 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版5-7 |
| 8 | 1a区 | Ⅰ層 | 磁器 | 皿 | 胴部 | － | － | － | 3.1～4.8 | 3.6 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 9 | 1a区 | 1層 | 陶器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 4.0 | 3.4 | 18C代 | 大堀相馬産 | 写真図版6-1 |
| 10 | 1b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 湯呑 | 口縁部～胴部 | － | － | － | 5.0 | 5.7 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 11 | 1b区 | Ⅰ層 | 陶器 | 不明 | 口縁部 | － | － | － | 2.5 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 12 | 1b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 口縁部 | － | － | － | 3.0 | 2.8 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 13 | 1b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 不明 | 体部 | － | － | － | 3.2 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 14 | 1b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 体部 | － | － | － | 4.0 | 3.0 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 15 | 2b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 3.5 | 3.2 | 近世 | 肥前産　染付 | 写真図版6-1 |
| 16 | 2b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 3.5 | 6.6 | 近世 | 肥前産　染付 | 写真図版6-1 |
| 17 | 2b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 体部 | － | － | － | 6.0 | 6.0 | 近代 | | 写真図版6-1 |
| 18 | 2b区 | Ⅰ層 | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 3.0 | 2.1 | 近世 | 肥前産　染付 | 写真図版6-1 |
| 19 | 1a区 | Ⅱ層 | 磁器 | 皿 | 体部 | － | － | － | 4.0 | 6.6 | 18C代 | 肥前産　染付 | 写真図版6-1 |
| 20 | 1a区 | Ⅱ層 | 陶器 | 碗 | 口縁部 | (10.6) | － | － | 6.5 | 14.6 | 16C後半～17C | 瀬戸美濃産、天目茶碗 | 写真図版6-1 |
| 21 | 1b区 | Ⅱ層 | 磁器 | 盃 | 底部 | － | － | － | 3.0 | 6.0 | 近代 | 畳付き、高台高4.0mm「念」の文字あり | 写真図版6-3 |
| 22 | 1b区 | Ⅱ層 | 陶器 | 皿 | 底部 | － | － | (6.4) | 5.0 | 8.7 | 江戸時代直前 | 美濃産 | 写真図版6-3 |
| 23 | 2a区 | Ⅱ層 | 陶器 | 甕 | 頸部～胴部 | － | － | － | 8.0 | 22.0 | 江戸末～明治 | 在地産 | 写真図版6-3 |
| 24 | 2a区 | Ⅱ層 | 陶器 | 皿 | 口縁部～体部 | (12.4) | － | － | 4～6.5 | 11.5 | 16C末～17C初 | 瀬戸美濃産、鉄絵皿 | 写真図版6-3 |
| 25 | 2a区 | Ⅱ層 | 磁器 | 湯呑 | 体部～底部 | － | － | 3.2 | 5.0～6.5 | 15.7 | 近代 | 畳付き、高台高7.0mm | 写真図版6-3 |
| 26 | 2b区 | Ⅱ層 | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 2.5 | 1g未満 | 江戸時代直前 | 中国産　染付 | 写真図版6-3 |
| 27 | 2b区 | Ⅱ層 | 陶器 | 鉢 | 胴部 | － | － | － | 6.0 | 8.3 | 近代 | 植木鉢 | 写真図版6-3 |
| 28 | 2b区 | Ⅱ層 | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 3.5 | 3.9 | 近代 | 銅板転写 | 写真図版6-3 |
| 29 | 2b区 | Ⅱ層 | 陶器 | ホウロウ | 底部 | － | － | － | 5.0 | 4.5 | 近代 | 在地産 | 写真図版6-3 |
| 30 | 3b区 | Ⅱ層 | 磁器 | 皿 | 体部～底部 | － | － | － | 5.0 | 3.7 | 近代 | 銅板転写 | 写真図版6-3 |
| 31 | 排土 | － | 磁器 | 盃 | 胴部 | － | － | － | 3.0～4.0 | 2.5 | 近代 | 小型盃 | 写真図版6-5 |
| 32 | 排土 | － | 陶器 | 鉢 | 胴部 | － | － | － | 5.0 | 4.3 | 近代 | 植木鉢 | 写真図版6-5 |
| 33 | 排土 | － | 磁器 | 蓋 | 体部 | － | － | － | 2.2～4.0 | 2.6 | 近代 | 碗蓋 | 写真図版6-5 |

（　）は推定値です

表2-1　出土遺物観察表（陶磁器他）

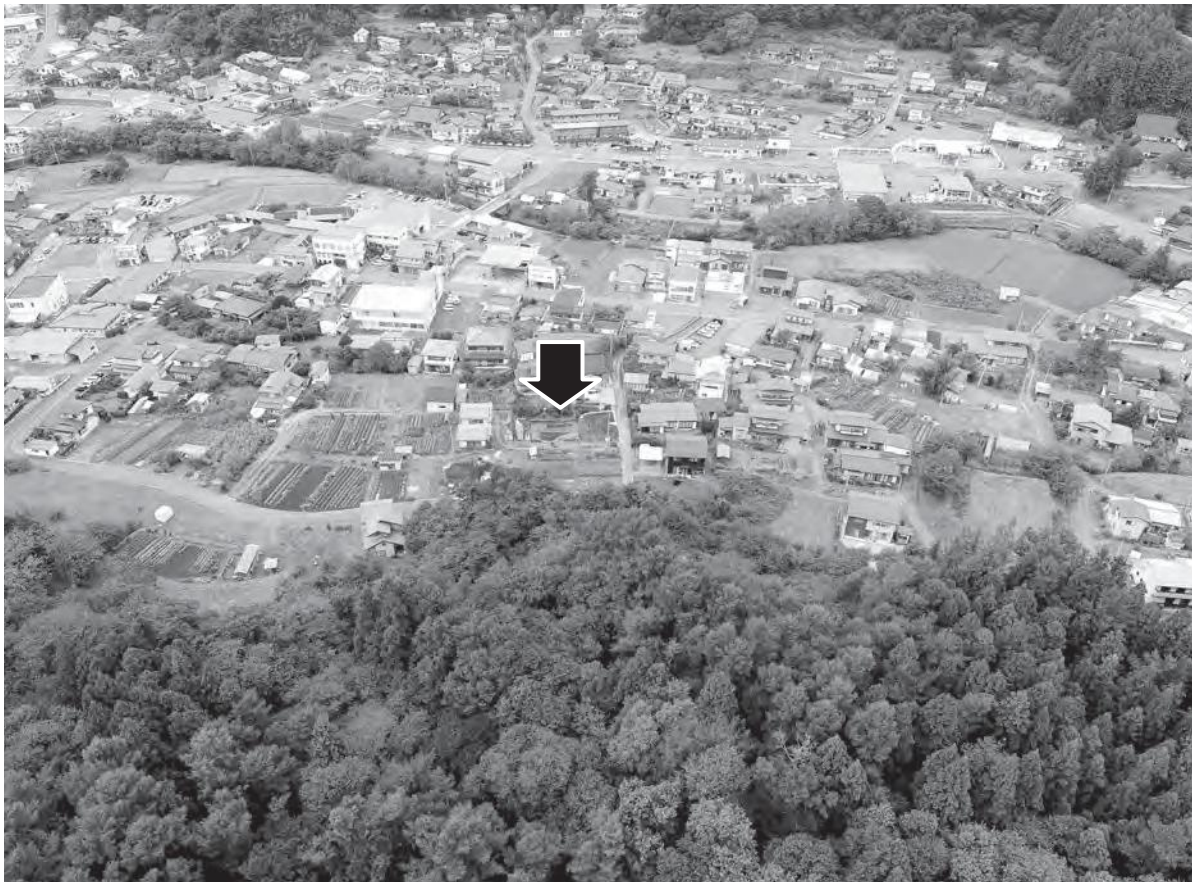
| No. | 出土地点 | 層位 | 種別 | 器種 | 残存部位 | 法量（cm） | | | （mm） | 重量(g) | 年代 | 備　　考 | 写真図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 厚さ | | | | |
| 34 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 口縁部 | － | － | － | 2.0～4.0 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-5 |
| 35 | 排土 | － | 土師器 | － | 底部 | － | － | － | 5.0 | 2.7 | 古代・中世 | 内外面ヘラナデ | 写真図版6-5 |
| 36 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 3.0 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-5 |
| 37 | 排土 | － | 陶器 | 片口鉢 | 口縁部～胴部 | － | － | － | 3.0～4.5 | 14.5 | 近代 | 在地産 | 写真図版6-5 |
| 38 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 口縁部～胴部 | － | － | － | 3.0～5.0 | 8.1 | 近代 | 飯茶碗 | 写真図版6-5 |
| 39 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 胴部 | － | － | － | 3.5～5.5 | 2.9 | 近代 | | 写真図版6-5 |
| 40 | 排土 | － | 陶器 | 火鉢 | 口縁部 | － | － | － | 13.0～15.0 | 15.1 | 19C | 在地産 | 写真図版6-5 |
| 41 | 排土 | － | 陶器 | 鉢 | 胴部 | － | － | － | 3.5 | 2.7 | 近代 | 植木鉢 | 写真図版6-5 |
| 42 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 体部 | － | － | － | 7.0～9.5 | 5.1 | 18C末～19C初 | 瀬戸産　陶胎染付 | 写真図版6-5 |
| 43 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 4.0 | 2.4 | 近世 | 肥前産　染付 | 写真図版6-5 |
| 44 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 体部～底部 | － | － | － | 5.0 | 3.5 | 近代 | 高台高6.0mm | 写真図版6-5 |
| 45 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 口縁部 | － | － | － | 3.0～4.0 | 3.3 | 近代 | 汁椀 | 写真図版6-7 |
| 46 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 3.0 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-7 |
| 47 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 口縁部 | － | － | － | 2.0 | 1g未満 | 近代 | | 写真図版6-7 |
| 48 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 底部 | － | － | － | 6.5～8.5 | 12.9 | 18C代 | 肥前産 | 写真図版6-7 |
| 49 | 排土 | － | 陶器 | 皿 | 胴部 | － | － | － | 5.0 | 5.8 | 16C末～17C | 肥前産　唐津皿 | 写真図版6-7 |
| 50 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 4.5 | 3.2 | 近代 | | 写真図版6-7 |
| 51 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 体部～底部 | － | － | － | 3.0～4.0 | 10.2 | 近代 | 銅板転写 | 写真図版6-7 |
| 52 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 体部 | － | － | － | 3.5～7.0 | 8.4 | 18C代 | 肥前産 | 写真図版6-7 |
| 53 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 底部 | － | － | － | 8.0 | 3.0 | 18C代 | 肥前産 | 写真図版6-7 |
| 54 | 排土 | － | 磁器 | 碗 | 胴部 | － | － | － | 3.5 | 6.1 | 近代 | 湯呑碗 | 写真図版6-7 |
| 55 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 4.0 | 4.2 | 18C代 | 肥前産 | 写真図版6-7 |
| 56 | 排土 | － | 磁器 | 皿 | 口縁部 | － | － | － | 2.5 | 1g未満 | 近代 | 染付 | 写真図版6-7 |

表2-2　出土遺物観察表（陶磁器他）

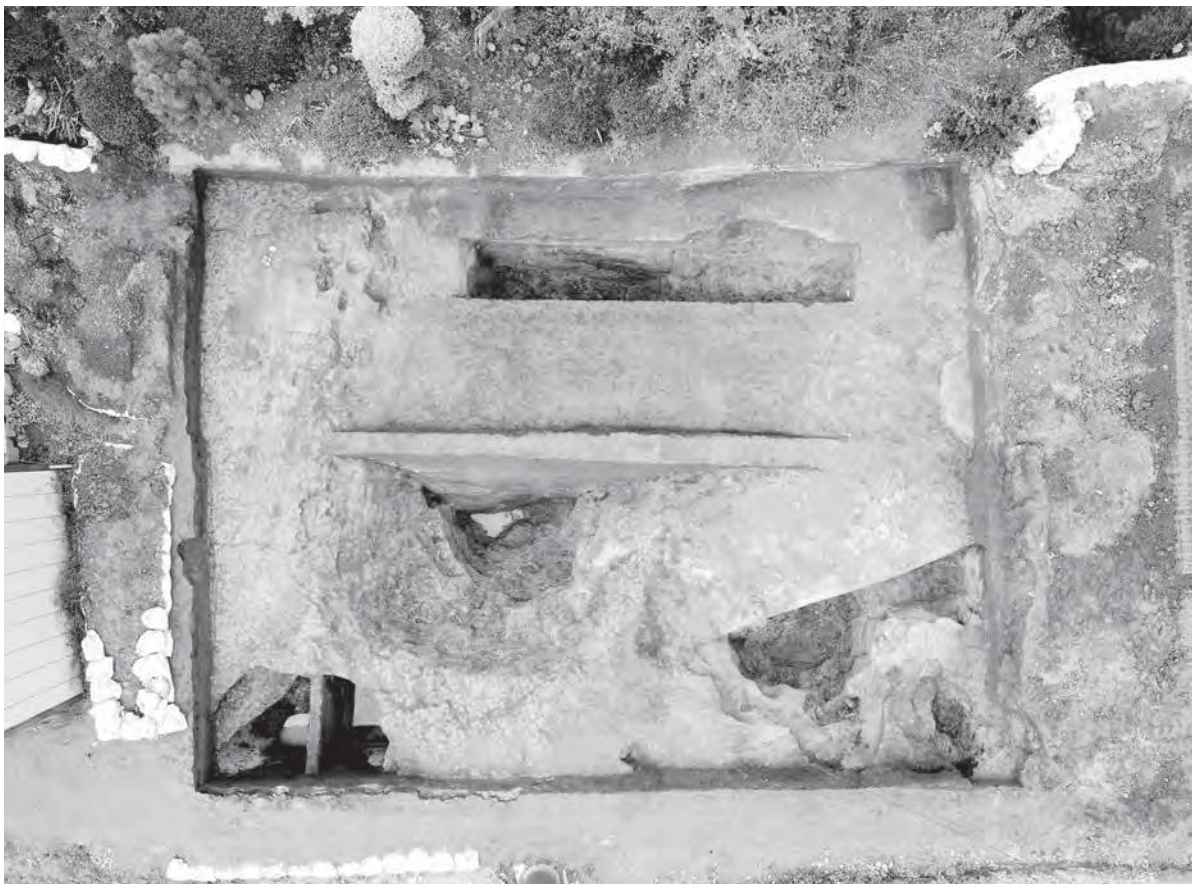
| No. | 出土地点 | 層位 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（mm） | 重量（g） | 写真図版 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SD-1 | 埋土 | 不明 | 5.0 | 4.0 | 0.5～1 | 21.0 | 写真図版5-6 | 1 |
| 2 | 3b 排土 | － | 刀子？ | 3.9 | 1.2 | 3.5～7.9 | 4.0 | 写真図版5-6 | 3 |
| 3 | 3b 排土 | － | 鉄滓 | 2.8 | 2.4 | 1.8 | 12.6 | 写真図版5-6 | 4 |
| 4 | 3b 排土 | － | 輪 | 3.1 | 0.5～1.0 | 5.0～6.2 | 2.4 | 写真図版5-6 | 5 |

表３　鉄製品観察表

１　調査区遠景（矢印直下が調査区、東から無人航空機による空中撮影）



２　調査区遠景（矢印直下が調査区、南から無人航空機による空中撮影）



１　調査区西側全景（直上から無人航空機による空中撮影）

２　SD-1　埋土断面（南から）

１　SD-1・2　平面（南西から）

２　SD-1・2　埋土断面（南から）

写真図版４

１　SD-3・4　平面（南から）

２　SD-3・4　埋土断面（南から）

３　SD-5　平面（西から）

４　SD-5　埋土断面（西から）

５　SX-1　平面（東から）

６　SX-1　埋土断面（東から）

７　SX-2　完掘状況（北西から）

８　SX-2　埋土断面（東から）

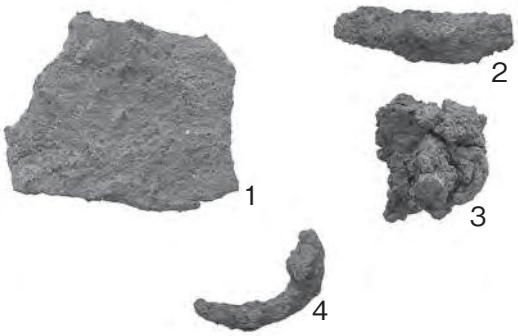
1　SX-3　平面（西から）

2　SX-3　埋土断面（北から）

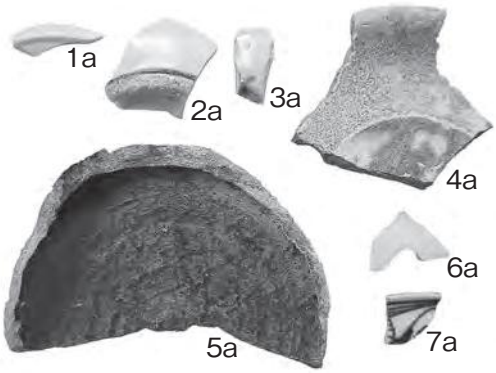
3　調査区東側遠景（北西から）

4　SD-1・2　遠景（南西から）

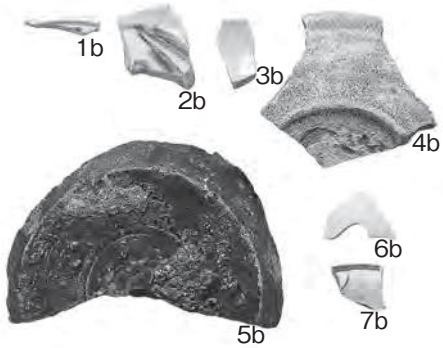
5　SD-1・2　調査状況（南から）



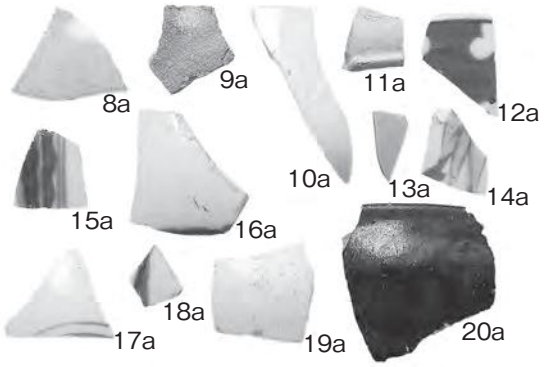

6　出土遺物（鉄製品）



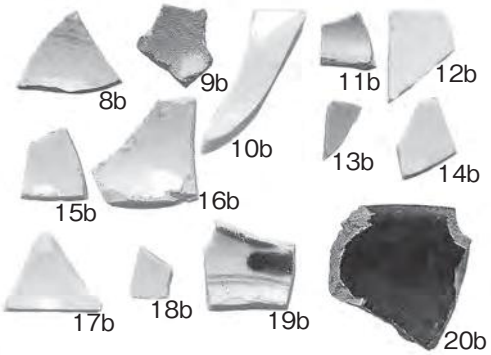

7　出土遺物（１）表ａ




8　出土遺物（１）裏ｂ

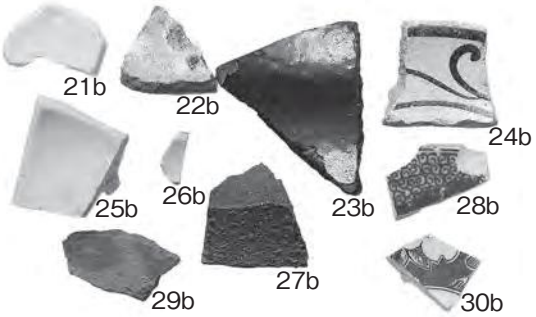



1　出土遺物（２）表ａ



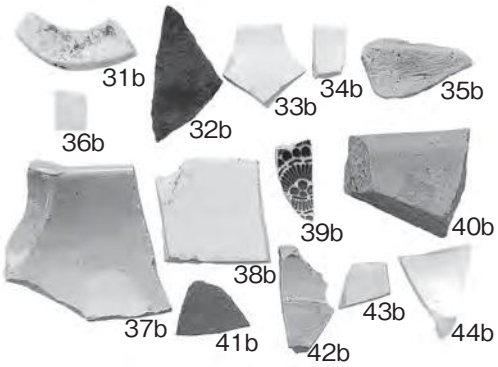

2　出土遺物（２）裏ｂ

3　出土遺物（３）表ａ

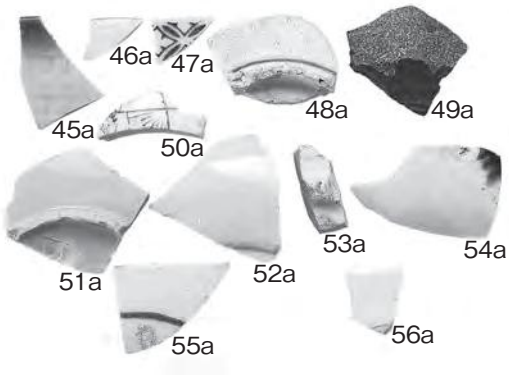



4　出土遺物（３）裏ｂ

5　出土遺物（４）表ａ




6　出土遺物（４）裏ｂ




7　出土遺物（５）表ａ

8　出土遺物（５）裏ｂ

# 抄　　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | はっちょうだていせきはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 八丁館遺跡発掘調査報告書 |
| 副書名 | 個人住宅新築工事に伴う発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第33集 |
| 編著者名 | 菅原孝明・光井文行・阿部充 |
| 編集機関 | 一関市教育委員会 |
| 所在地 | 〒021-8503　一関市竹山町7-5　TEL0191-26-0820 |
| 発行年月日 | 2022年3月22日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| はっちょうだて<br>八丁館 | いちのせきしだいとうちょうすりさわあざ<br>一関市大東町摺沢字<br>たじまざき<br>但馬崎64-8、64-12 | 03209 | NF70-0385 | 38°59′42″ | 141°19′55″ | 20200720<br>～<br>20201113 | 230㎡ | 住宅建築 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 八丁館 | 城館跡 | 平安、中世、近世、近代 | 竪穴遺構<br>大溝跡<br>溝跡 | 土師器<br>陶器<br>磁器<br>鉄器<br>鉄滓 | |


| | |
|---|---|
| 要約 | 調査区は、八丁館遺跡からやや北側に位置し、近世の摺沢宿に近い場所にある。<br>検出された遺構は、竪穴遺構、大溝跡、溝跡である。大溝跡のSD-1が17世紀代に位置付けられ、それよりも古いSD-2～SD-4は16世紀から17世紀代にかけて繰り返し作られていたことが判明した。<br>出土遺物も、瀬戸美濃産の天目茶碗や鉄滓などがあり、喫茶をたしなむ人や鍛冶関係の作業があったことをうかがわせる。<br>これらのことから、今回の調査結果は、八丁館が中世の城館として機能していたことや、摺沢宿の一部としてこの地域が利用されていたことを裏付けるものといえる。 |

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集

# 八丁館遺跡発掘調査報告書

個人住宅新築工事に伴う発掘調査

発行年月日　令和４月３月22日

編集・発行　一関市教育委員会文化財課
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話（0191）26-0820

印　　刷　トーバン印刷株式会社一関営業所
〒021-0821
一関市三関字日照107-5
電話（0191）31-8808